

〔研究ノート〕

ケインズの雇用関数

三 崎 一 明

I

J・M・ケインズは「雇用，利子および貨幣の一般理論」の第6章脚注¹⁾において次のように述べている。

たとえば， $Z_w = \phi(N)$ あるいはそれと二者択一的に $Z = W \cdot \phi(N)$ を総供給関数としよう（ここで W は賃金単位であり， $W \cdot Z_w = Z$ である）。次に，限界生産物の売上金額は総供給曲線上のあらゆる点において限界要素費用に等しいから，次の式が得られる。

$$\Delta N = \Delta A_w - \Delta U_w = \Delta Z_w = \Delta \phi(N)$$

すなわち $\phi'(N) = 1$ となる。ただしこの場合，要素費用は賃金費用に対して一定の比率をもつこと，そして各企業（その数は不変と仮定する）についての総供給関数は他の産業に雇用されている人々の数から独立であり，したがって個々の企業者に妥当する上記の方程式の各項は企業者全体について集計しうることが想定されている。このことは，もし賃金が一定であり，その他の要素費用が賃金支払総額の一定割合であるとすれば，総供給関数は貨幣賃金の逆数によって与えられる勾

1) Keynes [1]. 引用文は塩野谷訳によっている。

ケインズの雇用関数

配をもつ直線であるということを意味する。(pp. 55-56)

ケインズが述べている内容の当否についてはひとまずおいておく。ここでは、パティンキン²⁾に習って、コブ・ダグラス型の生産関数を使用して直線の勾配を持つ総供給関数のもとで、まず、予想総需要との関連について考察し、ついでケインズの雇用関数との関連について考察する。

II

コブ・ダグラス型生産関数としてつぎの式を考える。

$$(1) \quad y = AN^{\alpha}$$

y , N はそれぞれ生産量, 雇用量であり, A , α はそれぞれ定数である。また, $A > 0$, $1 > \alpha > 0$ である。

利潤極大条件から,

$$(2) \quad p = \frac{wN}{\alpha y}$$

をえる。ここで p , w はそれぞれ物価水準, 貨幣賃金率を示している。貨幣賃金率は外生的に所与と仮定する。(1) と (2) から次式をえる。

$$(3) \quad py^{\alpha} = \frac{w}{\alpha} N$$

y^{α} は総供給量であり, したがって py^{α} は総供給関数 Z となる。

$$(4) \quad Z = \frac{w}{\alpha} N$$

総需要関数 D として次式を考える。

-
- 2) Patinkin [3]. パティンキンはコブ・ダグラス型生産関数を使用して、賃金単位で表わした総供給関数が直線となることを示している。

$$(5) \quad D = C + I$$

C , I はそれぞれ消費, 投資を示しており, 投資は外生的に所与と考える。また, 消費は次式で考える。

$$(6) \quad C = (1 - s_w)wN + (1 - s_p)(D - wN)$$

消費は賃金および利潤からなり立っており, s_w , s_p はそれぞれの限界貯蓄性向を示している。また, $0 < s_w < s_p < 1$ を仮定する。(5), (6) から次式をえる。

$$(7) \quad D = \frac{s_p - s_w}{s_p} wN + \frac{I}{s_p}$$

均衡条件は次式で示される。

$$(8) \quad Z = D$$

総供給関数において, 価格が決まれば, 雇用量が決まり, 総供給が決定される。いま企業家が価格を予想したとする。企業家はその予想価格のもとで, 利潤極大となる雇用量, 生産量を決定する。それが総需要が要求する雇用量, 生産量と異なれば, 企業家は予想価格を変更し, その過程は均衡条件が満されるまで続くことになる。ただし, 企業家がある価格のもとで予想する総需要は, (3) にしたがうものではなく, (7) にしたがうものである。

総供給と総需要が一致した結果, 雇用関数がえられる。³⁾

$$(9) \quad N = aD_w$$

D_w は賃金単位で表わした総需要である。

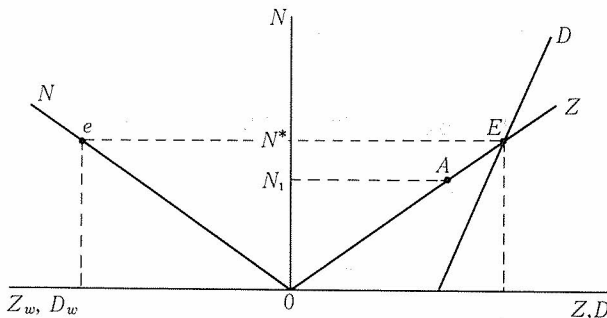
3) Keynes [1], p. 280 における定義による。

III

図において以上の点を考える。第1象限において、横軸は、総供給、総需要を測り、縦軸は雇用量を測っている。また、第2象限の横軸は賃金単位で表した総供給、総需要を測っている。Z線、D線、N線は総供給関数、総需要関数、雇用関数をそれぞれ図示したものである。コブ・ダグラス型の生産関数を想定した結果、総供給関数は直線として描かれ、それに対応して総需要関数も直線として描かれるように想定している。その結果、雇用関数も直線として描かれる。

点Eで総供給と総需要が等しくなり、それに相応する雇用量は N^* で表わされ、それがN線の点eに対応する。点eでは賃金単位で表わした総供給と総需要は等しくなっている。

いま企業家がZ線上の点Aに相応する価格を予想したとする。この場合、利潤極大となる雇用量は点 N_1 で表わされる。雇用量 N_1 では総需要は企業家が予想した価格での予想総需要よりも大きい。そこで、企業家は予想価格を変更し、生産量を増加させ、雇用を増やす。A点で企業家が予想する総需要は、D線に平行なものとなり、それはD線に最終的に一致する。



ケインズの雇用関数

参 考 文 献

1. Keynes, J.M. (1936), The General Theory of Employment, Interest and Money, Macmillan. 塩野谷祐一訳 (1983), ケインズ全集 7 『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社.
2. Misaki, K. (1984), A Note on the Aggregate Expected Demand, Otemon Economic Studies, Vol. 17, pp. 1-3.
3. Patinkin, D. (1979), A Study of Keynes' Theory of Effective Demand, Economic Inquiry, Vol. XVII, pp. 155-176.

(平成 5 年 2 月 18 日受理)